

POLE

北海道ポーランド文化協会会誌「ポーレ」
第 47号 2001.2.15

発行
北海道ポーランド文化協会
〒060-0052
札幌市中央区南2東2
河合楽器製作所北海道支社
電話 011-231-8661
FAX 011-221-4936

聖スタニスワフの殉教

—ポーランドの都市の伝説④—

栗原成郎

ヴァヴェル城が築かれている丘からヴィスワ川沿いに少しく離れたところに Skaryka スカウカ（「小岩」とよばれるもう一つの丘があります。そこには聖パウロ修道会の教会と修道院が建っています。現在のバロック様式の美しい聖堂は一七五一年に建立されたもので、聖大天使ミカエルと聖スタニスワフの名を冠しています。この丘はボレスワフ王と闘ったクラクフの司教スタニスワフの伝説と結びついています。

スタニスワフは一〇七九年五月八日に死にましたが、死後もなく、彼の敬虔な信仰生活と奇跡と殉教の物語はポーランドをはじめ他の国々にも広まりはじめました。聖スタニスワフはポーランドの守護聖人であり、その生涯の物語はポーランドの聖者伝説のなかで際立った位置を占めています。

ボレスワフ2世（一〇四二頃・八一）は、ドイツやキエフ・ロシアとの戦争、異教徒の反乱の鎮圧などの戦乱のつづいた時代にポーランドの失地を回復し、外敵の攻撃を防ぎ国を治めた勇敢で有能な君主でした。一〇七六年に王として戴冠したボレスワフは「大胆王」と呼ばれて国民の歓迎を受けましたが、度重なる軍事遠征のあいだにいつしか快樂と情欲のとりことなりました。このため、清廉なキリスト教倫理を信条とするスタニスワフ司教

はしばしば王をいさめ、ときには王の放埒を説教壇の上から公然と非難し



聖スタニスワフの殉教

ました。王は司教の訓戒が不愉快で堪らず、聖職者とのいさかいに決着をつける機会をねらっていました。その好機がまもなく訪れました。ピョトローヴィンという名字の貴族の騎士が死にました。スタニスワフ司教はかつてその貴族の所有地を購入したことがありました。しかしそのさい、土地の売買は両者の信頼関係により口頭の契約だけで行われ、契約書の取り交しはありませんでした。そのことを知っていた貴族の親族が司教をおとしめるために偽の証文を作成し、司教が代金を払わずに所領を横領した、と申し立てて司教を告訴しました。事件は王の法廷で裁かれることになりました。王は司教が自分の無実を証明する法的な文書を持っていないことを知って、この裁判を楽しみに待っていました。

しかし揺がぬ信仰をもつ司教はピョトローヴィンの墓に赴き、まず全知全能の神に祈りをささげ、特別なミサを執り行い、それから死んだ貴族に復活して法廷で真実を証言

するように命じました。敬虔な信仰者の召喚に応えて、ピョトロヴィンは墓から起き上がった。死装束のまま司教のあとに続いて王のもとへ向かいました。墓地に集まった群衆はこの奇跡を見て、いつせいに地にひざまずきました。王は蒼ざめ、陰うつな表情で玉座に座って、司教の無実を晴らすピョトロヴィンの証言を聴いていました。王は司教の無罪を宣言せざるを得ませんでした。

この事件により王はますます司教を憎むようになりました。王は依然として放蕩に身をまかせ、司教は虚しく訓戒をつづけました。

ある日、ポレスワフ王は怒りの発作に駆られて、馬でスカウカの丘の教会に乗りつけ、聖壇に向かって祈りをささげているスタニスワフ司教に近づき、剣を抜き一刀のもとに司教の首を斬り落としました。さらに、王は死者に復讐するかのよう死体を教会の中庭に引き

ずって行き、従者たちに体をばらばらに切りきざんで、池に投げこみ、魚の餌にするように命じました。司教の体は八裂きにされました。奇跡が起こったのはこの時でした。丘の上に一条の光が射



鷺がスタニスワフ司教のバラバラ死体をつなぎ合わせる

んだ壁はガラスの小窓のついた金属板で保護されています。現ローマ教皇ヨハネ・パウロ2世は聖スタニスワフを理想として修道した人です。

(創価大学教授)

しこみ、四羽の白い鷺が天から舞い降りてきました。白鷺たちは辱めを受けた司教の体を集めて、元どおりにつなぎ合わせました。司教の亡骸は信仰厚い人々の手によってねんごろに埋葬されました。ポレスワフ王はその後玉座を追われ、国外で哀れな流刑生活を送った、と伝えられています。

スタニスワフ司教の殉教の場であるスカウカにはさらにもう一つの奇跡が生じました。その池の水は万病に効くものとなり、多くの人々の病いを癒しました。奇跡の噂はヨーロッパじゅうに広まり、一三三年にはローマ教皇インノケンティウス4世によってスタニスワフは聖人の列に加えられるました。

現在、修道院の前には十七世紀に造られた美しい池があり、聖スタニスワフを記念する石碑がおかれています。教会の内部にはスタニスワフ司教の殉教を物語る絵がかかげられ、聖人の血に染まった石を埋めこ

第42回例会ご案内

「ポーランド料理を楽しむ会」

しばらくお休みしていた「ポーランド料理を楽しむ会」を再開します。講師はポーランド語教室の講師であるマジェーナ・ティムチョさんをお招きします。大勢の方の参加をお待ちしています。

| | |
|--------|-----------------------------------|
| 日 時 | 平成13年3月31日(土) 午前10時30分～14時 |
| 会 場 | 札幌市女性センター 料理室 (札幌市中央区大通り西19丁目) |
| 講 師 | マジェーナ・ティムチョさん |
| 会 費 | 1500円(エプロン・ふきんをお持ち下さい) |
| 申し込み〆切 | 3月10日(土) |
| 申し込み先 | 斎田(621-1738) |

谷本会長の「アイヌ絵を聴く」

毎日出版文化賞を受賞

谷本一之会長が昨秋、毎日出版文化賞を受賞されました。昨年六月出版された「アイヌ絵を聴く―変容の民族音楽誌」（北海道大学図書刊行会）が、同賞の企画部門での栄誉に輝いたものです。ここにお祝いを申し上げるとともに、借越ながら本書の概要を紹介させて頂きます。

本書は、アイヌ民族の音楽、踊り、儀式など芸能に焦点を合わせた民族誌の本で、B5判三九四頁の厚な体裁もさることながら、多数掲載されている図画、写真、楽譜、古文書などの資料が充実しています。付帯されているCDも貴重です。

副題に「変容の民族音楽誌」とあ

内容の濃い書物

遠藤道子・副会長

このように内容の濃い書物は、他に類がありません。「アイヌ絵を聴く」という題名もすてきですし、付属されているCDも価値が高いものです。心から受賞をお喜び申し上げます（既に、谷本ご夫妻と受賞をお祝いしました）。



析します。そして、次のように述べます。

るのは、端的に言えば、和人の接触、あるいは幕藩体制下の同化政策がアイヌ民族の芸能の変容にどのように関わったかという点が、本書のライトモチーフであることを示しています。その一例として、男女の踊りだった「鶴の舞」が女性のみの踊りへと変わっていった経緯が考察されています。その箇所（一〇五〜一〇六頁）には本書の基調があらわれているように拝察されましたので、ご紹介しましょう。

「鶴の舞」は和人を饗応するためのアイヌの代表的な踊りになっており、明治四十四年に永田方正は「……十歳なる女孫の弦歌に、百歳の二翁が鶴亀を舞ひて元旦をことほぐも明治聖代の余徳なるべし」と記しています。この永田の記述を引用しつつ、著者は「……鶴を踊るといふことが、『鶴は千年、亀は万年』という和人の伝統的意識を強く反映していることを説明している」と分

改俗、帰俗という名の同化政策が次第に強まるなかで、男女を区別する儒教思想、「千島の夷頼みをかけて我が皇国を仰ぐ

なるべし」とか「明治聖代の余徳なるべし」といった皇国史観を背景に、オムシャの礼式の女の舞として伝承されてきた鶴の舞は、蝦夷地における幕藩体制がアイヌの伝統文化を規定した一つの事例と位置づけられるべきものであり、その公式化される過程に、支配の構造やその深化の度合を読み取ることができると述べています。

このように谷本先生のお考えが明確に打ち出されているのも、多年にわたる民族音楽学者としての研究成果と、北海道アイヌ民族文化研究センター所長のお立場におられる見識とが有機的に結びついていればこそでしょう。ポーランドとの関係に着目しますと、アイヌの音楽を蠟管に録音したポーランドの人類学者プロニスワフ・

ピウスツキのことが、まず本書のはじめ（四頁）に出てきます。ピウスツキは一九〇三年（明治三六年）から〇五年にかけて樺太と北海道でアイヌの音楽を録音し、これが録音資料として最初のものと考えられているそうです。したがって「特に価値の高い資料」で、蠟管にはカムイユカラ（神謡）など北海道方言の十九作品と、ハウキ（英雄詞曲）など樺太方言の五十三作品、日本語の四作品、スラブ語の三作品が含まれていますが、この中のいくつかが付録CDに収められています。また、本書の「おわりに」の章にもピウスツキ蠟管の「トウス」についての考察があります（三四三〜三四四頁）。

もとより、緻密にして実証的な本書を、簡略にご紹介することは筆者の能力を超えており、本書の真価は手に取って頂いてこそ十全にわかるものです。毎日出版文化賞選考委員の一人である今村仁司氏は、「多方面の学問にとつて多大な刺激を与え、後に続く研究者にとつての基礎文献としての役割を果たすことであろう」と述べており、受賞の意義はこの評言に尽きているといえるでしょう。

（文責 三浦 洋）

ポーランドで思ったこと

遠藤 郁子



昨年、つまり二〇〇〇年の九月中旬から十一月初旬にかけて、シヨパンコンクール審査と、演奏旅行をかねてポーランドに滞在した。

前回の訪問は六年前、社会体制が変わって初めての訪問だったが、オケンチエ空港へ降りたとたん、まちがって別の国へ降りてしまったのでは？ と心配になる程、すべてが明るく、西欧化されていた。今回、ワルシャワは街がさらに明るく化粧され、クラコフスキエ・プシエドメシチエ通りのテラスや建物は溢れるほどの花で飾られ、人びとの身なりも以前とは違つてシックな装いの人びとが多くなった。衣料品店、化粧品店はじめ、食料品店には物が所狭しと並べられ、イタリー風の明るいレストランが軒を並べ、メニューも充実し、し

かも美味で、その昔レストランのメニューから注文の際「ニエ・マ(ない)の連発をされ、「では、何があるのか？」と聞いた方が早かつた時代が夢のように思えた。

日本が五十年かかつてとりこんだアメリカの文化が、ポーランドには十年足らずの間に一挙におしよせた。携帯電話、電子メール、ファーストフード店、往年のハリウッド名画も現代ハイテクを駆使したアクシオン映画も、コカコーラも、使い捨て文化も。ふんだんに使われる紙、紙、紙……、そして昔はなかつた分別されていないゴミの山……、通りで目につく物乞いの人びと……このギャップに私には、この国が病んでいるように見えた。

今、こんなに様変わりしたポーラン

ドで、シヨパンはどのように人びとに受け止められているのだろうか？

さまざまな希望のない戦いの日々、シヨパンの音楽を支えに戦つてきた人びと、そんなポーランド人たちの心にシヨパンの音楽は今日のように響いているのだろうか？

それが、私が最初に感じた危惧だった。私たち日本人が豊かさや引きかえに失つた大切なもの、その大切なものをポーランド人も失つてゆくのではないだろうか？ シヨパンが語つていた「ジャル」はどこへ行つたのだろうか？

シヨパンコンクールについてはNHKその他の報道で詳報されているので重複は避けよう。しかし、シヨパンの書き残した音、それを私は「楽譜という形の遺言」と言っているが、彼

の祖国への熱い思い、愛、清らかな心、気高い魂、大切にされるべきそれらの貴いことがらは一体、どこへ行つてしまったのだろうか……？ 楽譜による遺言を勝手に字句をとりかえ、音をとりかえ、自分の都合のよいように歪曲し……シヨパンコンクールを最初に創始したあの高い志はどこへ行つたのだろうか……。

そんなポーランド滞在中に、ふたつの美しい思い出が残っている。私の演奏旅行へ同行してくれた貧しい運転手のヨゼフ、悲しい眼が何を考えているのかわからない無口な彼は、私の仕事の待ち時間に黒パンのカナプキと水で質素な食事を済ませるような人だった。

カトヴィツエの美術館でのリサイタルに先だつた地元新聞社のインタヴューで、記者のマニユアル通りの質問に少々うんざりした私は、話題を変えて自分のペースでしゃべり出した。私がポーランドに来ている意味は？ 私がピアノに向かう意味は？ 私がガンの手術から十年を経て完治したこと、ガンと同時の離婚で裸一貫の無一物になったこと、だから天からいただいた二度目の命は「天命」として、同じような悲しみ苦しみ、ハンディキャップを背負つた人びとのために使っていること、

また、九才で白血病で急逝した鎌倉市の児童の清らかな遺志を受け継ぎ、「花基金」を設立。私のコンサートに送っていた花の代わりにその代金を募金箱へ入れていただき、微々たる金額ながらハンディを背負った人びとに送らせていただいていること。

ポーランドのみではなく、日本でもこんな話をすれば、「何故、そんな得にもならないことを？」と笑う人種がいることを私は知っている。逆に、そんな殺伐とした世の中になっってしまったからこそ、人間らしい波動を共有してゆきたいと思っただけだ。

インタヴューの帰った後、広間の片隅でじつと話を聞いていたヨゼフが、つかつかと私の所へ歩いてきた。

「……感動しています……あなたの清らかな心……ここに大切にしてきたシヨパンの記念硬貨があります……これをどうしても受け取ってほしい」。

私が受け取りかねていると彼はそのコインを無理に私の手に託し、ふりかえりざまに顔をおおって涙をふいた。彼は私の波動に共振してくれた数少ない人だった……。

シヨパンコンクールの全ての行事



優勝した リ・ユンディ（中国）

が終わり、ワルシャワに静けさの戻った晩、明朝の出発を控えた私は、昔定宿にしていたプリストルホテルへ足を向けた。新しく模様替えされたホテルには古きよきポーランドがそのまま残っていた。

食事の間流れてくる、やさしく温かく懐かしいピアノの音、それはついぞコンクールの間には聞くことのできない響きだった。

「この時世が変わって、こうして生活のために弾いています……心から……」。

昔、ワルシャワフィルでチェロを

弾いていたという初老のピアニスト、そのピアノの音色に、私は砂をかむような緊張から放たれ、思わず、ポトポトと涙をおとした。彼の美しい音の波動に、今度は私が共振共鳴したのだった。

どんな世の中になったとしても、シヨパンの美しい心や、気高い魂がこれからも語り継がれていってほしい。そして、人間らしい心がよき波動を広げてゆける世の中であってほしいと、心から思った。
(えんどう いくこ・ピアニスト)



【シヨパン国際ピアノコンクール】

「ピアノの詩人」と呼ばれる作曲家フレデリック・シヨパン（一八一〇～一八四九）の名を冠し、一九二七年から五年に一度、シヨパンの生地であるポーランドのワルシャワで開催されている世界最高峰の国際ピアノコンクール。戦時期の中断を挟み今年が第十四回の開催となる。

過去の入賞者にはマウリツィオ・ポリーニ（一九六〇年）、マルタ・アルゲリッチ（一九六五年）やスタニスラフ・ブーニン（一九八五年）などがあり、その後世界的に活躍している著名なピアニストが数多い。



シヨパンの秋

山川素子

コンクール本選のチケットを手に入れるべく、朝からホール前に並んでみることにしました。グダンスクでピアノを勉強している友人に「週末の三次予選だから、さすがに指定席は売り切れだけど、立ち見券なら必ず当日発売されるはず。絶対に行く価値あるよ!」と

チケットは開演一時間前の午前九時から発売とのこと。本当はもつと前もって行くはずだったのに、実際には八時三十五分になっていたのですでに長蛇の列になっていることを覚悟していたのですが、幸いにも二〇人目あたりに並ぶことができました。その上まわりは大方ポーランド人です。音大生らしい雰囲気

が多かったように思います。時間に鷹揚なお国柄なので、たいそうなコンクールといっても、こぞつて朝早くから並んだりはいらないようです。「日本人なら、前もって指定席を買っているのが普通で、安い立ち見券を選ぶのは地元民なのかも!」などと勝手に考えたのですが、そうこう待っているうちに、列の後ろのほうには日本人の顔もちらほらと目に付き始めました。

無事に手に入れた立ち見チケットは十ズウォーティ、日本円に換算するとせいぜい二五〇円くらいでしょう。ちなみに、ポーランドでのごく普通のクラシック・コンサートは十五ズウォーティぐらいで(でもワルシャワだと倍かな?)、映画は一本十二ズウォーティです。

開演までのしばらくの間は、コンクールのカタログを買ってながめていました。カタログには九十八名の演奏者それぞれの顔写真と略歴のほかに、一次から四次のファイナルで演奏する予定の曲目がすべて記載されています。こうしたコンクールで勝ち進んでいくためには、事前に何曲も準備していなければならぬことをあらためて知りました。

今回は特に優秀な演奏者が多く、レベルの高いコンクールになったそうです。そうした場に居合わせられたことはとても幸運だったと思えます。

その上、本来なら会場の壁際に張り付いて、演奏を聴くはずだったのですが:なんと、たった十ズウォーティでいい席に座ってきけてしまったのです!

開演のベルとともに、空いている席には立ち見券の同志たちがぞくぞくと座り始めました。私は一瞬間食らったのですが、「ここはありがたく流儀に従わねば」と周囲の人々を見習うことにしました。その時は、全然気がつかなかったのですが、実際にその席の券を買うとすればどう

考えても二百ズウォーティは下らないはずなのです。

(それでも日本円ではたったの五千円ほどでしょうか。これで世界有数のコンクールのセミ・ファイナルが聴けるなんて日本では考えられないはず:実際、日本からの観戦ツアーは八〇万円くらいで組まれているそうです。物価が違うとは言え、日本は本当に何でもお金がかかりますね。)

「こない席に座ってられるのも、本来の指定席券の持ち主が現れるまでのこと」と覚悟していたのですが、隣の方(日本人です。)から「その席の人は今日来なくなったから座っていいですよ」と言われて、結局最後までゆっくり座って聴くことができました。本当にラッキーでした。



ポーランド語講習会30期を終えて

当協会事業の一環として1989年春開講来、昨秋で30期を数えるに至り、その間会員を中心に延べ325人が受講しました。ポーランド旅行や仕事に備えて言葉を覚えたい方、ポーランド滞在のよき思い出を絶やしたくない方、語学の一環として勉強される方、ポーランド文化に接したい方など、60才代から小学生まで幅広い階層の方々が受講した。授業の内容は入門・初級者対象に、読む・書く・話すだけに留まらず、唄って覚えるポーランド語、新聞雑誌などからポーランドの時事・文化など幅広く、楽しい雰囲気の中で行われました。

なお、受講者の中から現在、青年海外協力隊で2名、ポーランド語長期研修で3名の方々がグダンス

ク・ワルシャワ・チェンストホヴァで頑張っておられ、今後のご活躍と発展を期待しております。

この間のご指導に当たられたカジミエシュ・コグト・亀岡延枝ご夫妻、熊倉ハリナ、高岡美保、マジェーナ・チムチョ及びマウゴジャータ・マディ各講師に深甚の謝意を表する次第であります。

新年度からの計画

今後は目的時期・期間の要望に応じ、五人以上のグループ対象で不定期開催方式で継続します。申し出をお待ちしております。〔事務局〕



第30期ポーランド語講習会 記念

〔OG通信〕

ヴァルシャヴァで

ポーランド語同窓会

□もうこちらの生活にも慣れ、今は毎日ポロニクムに通っています。井上さんや木内さんともこちらで会うことができそうです。私は来年三月に戻る予定です。向寒の折り、お体に気を付けられ、講師先生はじめ教室の皆さんに宜しくお伝え下さい。

宮崎はるか

十一月一日 ヴァルシャヴァにて

□ポ語教室記念写真をとっても懐かしく拝見しました。有難うございます。今年の北海道は雪が多いそうですね。こちらは初雪も未だなので、何か物足りなく感じています。帰国するまでには、私のポーランド語も上達していると良いのです

菊池多美絵

十二月四日 グダインスクにて

□先日、あまり離れていない井上さん宮崎さんに会いました。久し振り

に、思いっきり日本語で話ができるポ語同窓会でした！ポ語は知れば知るほどその難しさに閉口してしまいます。こちらは暖冬で、まだ雪も降っていません。よい年をお迎え下さい。

木内涼子

十二月十一日
チェンストホヴァ

□札幌は随分雪が降ったそうですね。私は十一月から、北大に留学していたゾシャさんと同じアパートで暮らしております。一緒に料理したり、買い物したり、仲良くしております。皆さんよい年をお迎え下さい。

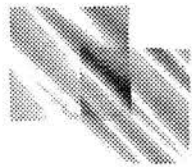
井上暁子

十二月二十一日
ヴァルシャヴァにて

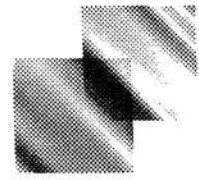
□新世紀の幕開け、ポ語講習会の皆さん、お変わりございませんか。早いものでポーランドで二回目の新年を迎えました。今夏帰国の予定で、お目にかかれる日を楽しみにしております。幸先よい年となりますように。

山川素子

一月一日
グダインスクにて



2001年北海道ポーランド文化協会主催



ポーランド旅行のご案内

皆様心待ちにしていたポーランド旅行の詳しい日程と費用の概算が決まりましたのでお知らせいたします。

旅行期間 8月30日(木) - 9月9日(日)

旅行費用 33万円(東京発の方々は35万円)

8月30日午後2時千歳発KLMオランダ航空アムステルダム経由でワルシャワに2泊、クラクフに1泊、ザコパネに2泊、ポーランドを出てハンガリーのブダペスト2泊、スロヴァキアのブラチスラヴァ1泊、オーストリアのウィーン1泊、アムステルダム経由で9月9日(日)午前7時千歳到着の予定となっております。東京その他からの参加の方々でも前泊、後泊は必要ないと思われます。

また初秋のポーランドの良さを感じていただくためにゆっくりと日程を組みました。2度目や3度目の方々も十分に旅行を楽しんでいただけると確信しております。旅行代金はドル建てのため変更の可能性があります。前回お知らせした日程とすこし違いがありますが飛行機の都合ですのでご了承下さい。

詳しい日程は次のとおりです。

| | | | | |
|-------|-------------------------------|-------|-----------------|----------|
| 8月30日 | pm 2:00 千歳空港発 | ----- | pm 21:25 ワルシャワ着 | ワルシャワ泊 |
| 8月31日 | ワルシャワ市内観光 | | | |
| | 午後ジェラゾバポーラ(シヨパンの生家)見学 | | | ワルシャワ泊 |
| 9月1日 | ワルシャワ発(汽車) | ----- | クラクフ着 | |
| | クラクフ市内観光 | | | クラクフ泊 |
| 9月2日 | ヴィエリチカ見学 | | | |
| | 希望者にはオシフィエンチム (アウシュヴィッツ)見学 | | | |
| | クラクフ発 | ----- | ザコパネ着 | ザコパネ泊 |
| 9月3日 | ザコパネにてハイキング | | | |
| | 山岳民族舞踊を楽しみながら夕食会 | | | ザコパネ泊 |
| 9月4日 | ザコパネ発 | ----- | ハンガリーブダペスト着 | ブダペスト泊 |
| 9月5日 | ブダペスト市内観光 | | | ブダペスト泊 |
| 9月6日 | エステルゴム、ヴィシェグラード、センテンドレ観光 | | | |
| | スロヴァキア ブラチスラヴァ観光 | | | ブラチスラヴァ泊 |
| 9月7日 | ブラチスラヴァ発(水中翼船) | ----- | ウィーン着 | |
| | ウィーン市内観光 | | | ウィーン泊 |
| 9月8日 | am 10:55 ウィーン発 | | | |
| 9月9日 | am 7:20 千歳着 | | | |

オプション

※9月1日にトルンを訪れる計画もあります。

※参加希望の方、お問い合わせの方は同封の申込み用紙を下記小笠原までファックスまたは郵送してください。

=====

小笠原 昭子

069-0851 北海道江別市大麻園町28-18

Tel : 011-386-3405

Fax : 011-387-9016

e-mail : Akiko.Ogasawara@mb6.sekyou.ne.jp

=====



本年度の事業計画決まる

二〇〇〇・二〇〇一年度総会

- (一) ショパ
ンの練習曲作
品一〇・五
六、(演奏)
國谷 聖香
- (二) ショパ
ンの練習曲作
品一〇・十一
十二、(演奏) 塚原恵美子

本年度の総会が十月十三日(金)午後六時半より、すみれホテルで行われました。総会では、谷本一之會長による挨拶がありました。

さらに、薄井豊美氏の司会で以下のような順序で行われました。

- (一) 一九九九・二〇〇〇年度事業
および決算報告、監査報告
- (二) 二〇〇〇・二〇〇一年度事業
計画と予算
- (三) 新年度役員について
- (四) 協会財政の立て直しについて

会員の減少に伴って、収入が減っているので次年度から普通会员の会費を三千元に値上げする案が出され承認された。

(五) 協会活動の見直しについて

(六) その他

このあと懇親会に入り、会食に先だつて次のようなピアノ演奏が行われました。

なお、総会で承認された議案の内容は以下の通りです。

前年度の主催事業

《例会》

- ▼第三十八回例会 ポーランドの
フォークダンスのつどい十月十一日
(月) 札幌市女性センター(参加者
六十三名)
- ▼第三十九回例会 ビデオによる
ポーランド映画鑑賞会「鷲の指輪」
二月十八日(金) かねる2・7(参
加者十三名)
- ▼第四〇回例会 ^{札幌本}ヤカドピッチ
氏「東欧革命十年のワルシャワ」三
月十四日(火) すみれホテル(参加
者二十名五名)
- ▼第四十一回例会 ビデオによる
ポーランド映画鑑賞会「トリコロ
ル・青の愛」八月一日(火) かねる

2・7(参加者二十二名)

《ポーランド語講習会》

- ▼第二十八期 一九九九年九月二十
九日(水) より八週間(参加者十一
名)
- ▼第二十九期 二〇〇〇年五月十七
日(水) より八週間(参加者九名)
- ▼第三〇期 二〇〇〇年九月二十七
日(水) より八週間(参加者六名)

《その他》

- ▼ポーレ発行 第四十四号(一月二
十五日) 第四十五号(六月一〇日)
第四十六号(十月一日) 計三回
- ▼総会 一九九九年十月十五日(す
みれホテル)
- ▼運営委員会 三月二十七日、九月
六日

本年度の事業計画

《主催事業》

- ▼第四十二回例会 「マジエーナさん
の料理教室」
- ▼フォークダンスの会(二〇〇一年
七月頃)
- ▼ビデオによるポーランド映画鑑賞
会

《後援事業》

- 音楽会、展覧会、映画会などを
適宜行う
- 《ポーランド語講習会》

《その他》

- 希望により随時行う
- 会誌ポーレ発行(年間三回)
- ポーランド旅行
- 十五周年記念誌
- 総会二〇〇一年十月ごろ
- 運営委員会 三回程度

本年度役員

(本年度までの2年任期)

- 会 長 谷本 一之
- 副会長 遠藤 道子
- 運営委員
- 安藤 厚・薄井 豊美
- 小林 暁子・斎田 道子
- 佐々木保子・霜田千代磨
- 鈴木 英明・高岡 美保
- 中島 洋・灰谷 慶三
- 本間 富雄・三浦 洋
- 安田 誠子・吉野 悦雄
- 渡辺 卓
- ポーレ編集委員
- 小笠原正明・斎田 道子
- 佐々木保子・高岡 美保
- 三浦 洋
- 監査委員
- 富山 信夫・吉田 宏
- 事務局長
- 小笠原正明

1999・2000年度会計決算書

| 【収入の部】 | 予算 | 決算 | 内訳 | 単位：円 |
|---------------|---------|---------|--|------|
| 会費 | 400,000 | 414,620 | 会費全額の84%、郵便振替払出料差引後 | |
| その他 | 1,000 | 6,536 | 寄附、銀行利子 | |
| 小計 | 401,000 | 421,156 | | |
| 繰越金 | 480,817 | 480,817 | | |
| 合計 | 881,817 | 901,973 | | |
| 【支出の部】 | | | | |
| 事業費 | 270,000 | 346,688 | 例会4回:142,918、総会補助:118,970、* 語補助:84,800 | |
| 連絡費 | 95,000 | 35,850 | ポーレ発送、はがき、切手他 | |
| 編集費 | 35,000 | 40,435 | ポーレ制作費、原稿料他 | |
| 会合費 | 53,000 | 42,011 | 運営委員会他 | |
| 事務費 | 190,000 | 199,377 | 人件費、事務用品、 | |
| 寄付金 | 89,910 | 0 | *「ラット」送金予定としての予算 | |
| 予備費 | 148,907 | 105 | | |
| 小計 | 881,817 | 664,466 | | |
| 繰越金 | 0 | 237,507 | 銀行預金:68,691 郵便局:132,510 現金:36,306 | |
| 合計 | 881,817 | 901,973 | | |

2000・2001年度会計予算書

| 【収入の部】 | 前年度決算 | 予算 | 内訳 | 単位：円 |
|---------------|---------|---------|--------------------------------------|------|
| 会費 | 414,620 | 500,000 | | |
| その他 | 6,536 | 1,000 | 銀行利子、その他 | |
| 小計 | 421,156 | 501,000 | | |
| 繰越金 | 480,817 | 237,507 | | |
| 合計 | 901,973 | 738,507 | | |
| 【支出の部】 | | | | |
| 事業費 | 346,688 | 340,000 | 総会補助:120,000 例会:170,000 語学講習会:50,000 | |
| 連絡費 | 35,850 | 100,000 | ポーレ発送3回、その他 | |
| 編集費 | 40,435 | 40,000 | ポーレ制作費、原稿料他 | |
| 会合費 | 42,011 | 30,000 | 運営委員会、その他 | |
| 事務費 | 199,377 | 190,000 | 人件費、事務用品 | |
| 予備費 | 105 | 38,507 | | |
| 小計 | 664,466 | 738,507 | | |
| 繰越金 | 237,507 | 0 | | |
| 合計 | 901,973 | 738,507 | | |

「ポーレ」編集委員会
小笠原正明・斎田道子
佐々木保子・高岡美保
三浦洋
(連絡先)
621・1738 (斎田)

会費値上げについて

会員の減少、とくに団体会員の減少に伴って収入が減り、この2、3年繰越金が大幅に減っています。このままで行けば来年には赤字となることが予想されます。

会員数の大幅な増加はむずかしいと思われまますので2001年から普通会员の会費を3000円に値上げすることに決めました。

会員の皆様のご協力をお願いします。

【振込先銀行口座】
北洋銀行大通支店 (普)
(店番) 301
(口座番号) 0605-084
北海道ポーランド文化協会
事務局長 小笠原正明

【郵便振替口座】
02740-5-19735
北海道ポーランド文化協会

POLE 第 47 号(2000.12.15)目次

| | |
|--|----|
| 栗原成郎「ポーランドの都市の伝説④聖スタニスワフと殉教」 | 1 |
| 〈第 42 回例会〉「ポーランド料理を楽しむ会」(2001.3.31)のお知らせ | 2 |
| 「谷本会長の『アイヌ絵を聴く』毎日出版文化賞を受賞」(紹介:三浦洋)、「内容の濃い書物」(遠藤道子) | 3 |
| 遠藤郁子「ポーランドで思ったこと」 | 4 |
| 山川素子「シヨパンの秋」 | 6 |
| ポーランド語講習会 30 期を終えて、OG 通信・ヴァルシャヴァでポーランド語同窓会(宮崎はるか、菊池多美絵、木内涼子、井上暁子、山川素子) | 7 |
| 〈第 44 回例会〉第 3 回ポーランド旅行(2001.8.30~9.9)のご案内 | 8 |
| 第 14 回(2000~2001 年度)総会(2000.10.13)報告 | 9 |
| 会費値上げについて | 10 |